歴史発見!!「なるほどおり」
―宇都宮の新しい顔をめざして―

宇都宮大学　中村祐司研究室

赤津美香　石田奈津美　磯谷萌

＜目次＞

１．問題意識

（1）宇都宮市の中心市街地

（2）目標とする歴史軸の姿

２．歴史軸の現状と課題

３．提案～「なるほどおり」の実現～

（1）「なるほどおり」の整備

（2）歴史資料の展示

（3）空き店舗・空き地の活用

（4）歴史発見スタンプラリーの実施

４．終わりに

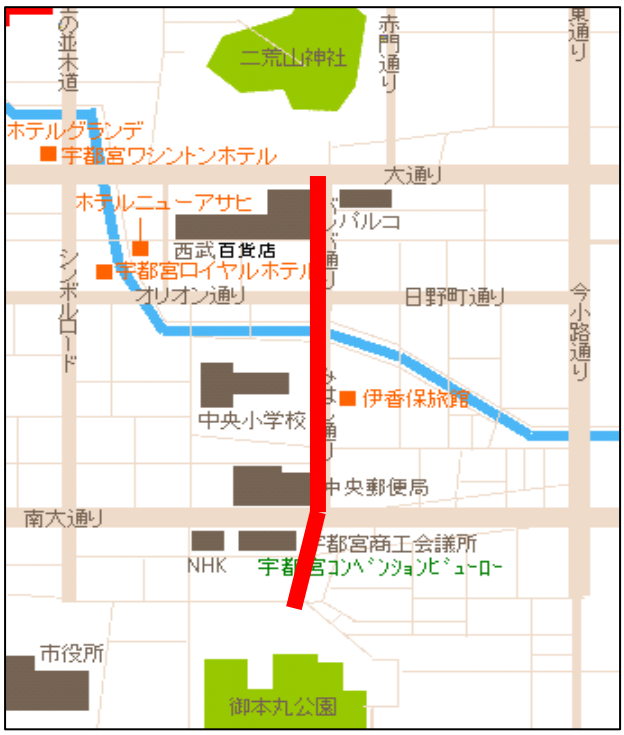
１、問題意識

(1)宇都宮市の中心市街地

宇都宮市の中心市街地と聞いて多くの人が一番に思い当たるのは、オリオン通りやユニオン通り（以下、中心商店街）といった商店街であろう。以前ほどの活気はなくなってしまったのが事実ではあるが、現在でも北関東有数の商業集積を誇っている宇都宮市において、中心的な役割を担っていることは確かである。しかし裏を返してみると、宇都宮市には商業機能しか魅力がないということを浮き彫りにしてはいないだろうか。

そのような現状の中で現在、中心商店街から程近いところに宇都宮城の一部の復元工事と、それに伴う城址公園の整備がなされ、平成 18 年度中には完成予定である。これらは市のシンボルとして中心市街地活性化の役割を背負っているが、その周辺地区は宇都宮城復元に際して色めき立っているという印象は皆無である。また、歴史軸として位置づけられているバンバ通り、みはし通り、本丸通りは、中心商店街付近に立地する二荒山神社と城址公園とを直線でつないでいるが、歴史の趣が感じられる通りとは言いがたい。二荒山神社の下之宮や琴平神社、御橋などの歴史的な資源が点在しているにもかかわらず、実際は見落としてしまうほど存在感がない。1600 年もの時代を生き抜いてきた二荒山神社がビルとビルの間に挟まれているという現状からも分かるように、宇都宮市の歴史は街に埋もれ切ってしまっているのである。将来的に宇都宮城そのものが復元されることになっても、このままでは十分にその魅力を生かせないのではないだろうか。そのために必要なのは、中心市街地に歴史という新しい顔を加えることではないかという意識から、城址公園へと延びる歴史軸のあるべき姿について検討していきたい。

＜歴史軸の位置＞



宇都宮市観光コンベンション協会 HP より

http://www.utsunomiya-cvb.org/

（2）目標とする歴史軸の姿

新しい顔を作るという今回の提案において、目標とする歴史軸の姿は、歴史資源を存分に生かし歩くだけで歴史を感じることができる通り、すなわち歴史の香り立つ通りと定義する。

そこで、歴史軸が担う役割は 2 つある。まず 1 つは、現在埋もれてしまっている宇都宮市の歴史に再び光をあてることである。次に、復元される宇都宮城と城址公園の存在感を十分にアピールすることで、人々の足が自然と城址公園まで伸びるようにすることである。これらは、二荒山神社と城址公園をつなぐこの歴史軸でしかなし得ない役割である。それには通りの安全性の確保、美しい景観の創出、3 つの通りにおける統一感の醸成が必須事項であり、重点課題と言える。

これらを満たす通りの実現により、歴史という要素を全面に押し出した通りを中心市街地に整備し、街に新たな顔を作り出すこと、そしてそこが地域の人にとって、郷土の歴史や文化を感じられるもの、さらには郷土愛を生み出すものとなり、他の地域の人にとっては宇都宮市の歴史が分かる、市の顔としての役割を果たすものとなると考える。

2、歴史軸の現状と課題

前項において、目標とする歴史軸の姿を実現するための必須要項として、通りの安全性の確保、美しい景観の創出、3 つの通りにおける統一感の醸成という 3 項目を挙げた。これらのうち、1 つでも欠けてしまっては、人々が安心して楽しむことのできる通り、宇都宮市の新しい顔となる通りの実現はなし得ないであろう。

では、実際に歴史軸の現状はどうなっているのだろうか。目標とする姿と比較し、どのようなギャップが存在するだろうか。先に述べた 3 項目に着目し、実際に歴史軸を歩いてみた。その際に気付いたこと、感じたことを、通りごとに述べていく。

バンバ通り

大通りからオリオン通りに入る交差点までを結び、両脇を大型店に挟まれたこの通りは、人通りも多いため、車道、歩道ともに整備が済んでおり石畳が敷いてある。歩道の幅は広くとられている。しかし、アーケードの下に入ると、それを支える柱が歩道の所々に立っており、その柱から車道までのスペースには花壇や看板、ゴミ捨て場が設置されているため、実際に歩ける幅が狭くなってしまっている。そして、これらは景観を損ねる要素にもなってしまっている。花壇に植えられている植物は、手入れが行き届いていないためか、枯れてしまっている。看板や広告は、公的・私的なものを問わず非常に多く、通り全体に雑然とした印象を与えている。またゴミ捨て場では、ゴミ袋がむき出しのまま捨てられている。ゴミが置かれていない時も、その部分が汚れており、視覚的によくない。

この通りから二荒山神社を望むと、参道のすぐ両脇が足利銀行と旧上野百貨店に挟まれており、神社が目立たなくなってしまっている。しかし、この地区はじきに再開発され、二荒山神社への視界を確保した広場が整備される予定であるので、この状況は改善されるであろう。また、パルコの西側には、時々イベント会場として使用される二荒山神社下之宮が立地しているが、古いものと新しいものが視覚的に重なっており、アンバランスな印象を受ける。

どうしても触れておきたいことが、オリオン通りに入る交差点の角に立地している風俗店の存在である。建物の全面に写真や広告が出ており、非常に景観を損ねるものとなっている。歴史軸という通りの性質上、あってもいいものか疑問に感じる。店舗の移転や広報活動の縮小を命じてもいいのではないだろうか。

みはし通り

オリオン通りに入る交差点から国道123号線までをつなぐこの通りは、交通量が多いが、その割に幅が狭いように感じる。歩道と車道は白線で区切られているだけであり、歩道の幅は人が１人歩けるほどである。さらに、電柱が所々遮っているため、非常に歩きにくい。自動車がすぐ側を走り、対向者とすれ違う時などは危険である。

景観を損ねる要素として、電柱、電線が挙げられる。通り一帯に多く見られ、雑然とした印象を与えている。また、シャッターの閉まった店舗も挙げられる。通りにはほぼ隙間なく商店や住宅が軒を連ねているが、閉店しているのか休業中なのか分からない店舗が非常に多い。歩行者もあまり見当たらないのも相まって、暗く寂しい印象を受ける。

この通りには古くからの歴史遺産が存在するが、見たところそれが十分に生かされていない。まず、釜川にかかる御橋について見ると、それ自体は綺麗なのだが、付近の植木の手入れが行き届いていないためか、御橋の魅力を半減させてしまっている。釜川への視界も遮っている。御橋近くの琴平神社については、すぐ両側を背の高い建物に挟まれ、存在感が薄くなってしまっている。神社を囲む塀の前にゴミや荷物が置かれてしまっているのも残念な点である。

本丸通り

国道 123 号線から城址公園までを結ぶこの通りは、車道、歩道ともに整備されており石畳が敷いてある。歩道は一段高くなることによって車道と区別されており、幅も広くとられている。

電柱、電線が地下に埋められているため、通り全体にさっぱりとした印象を与えている。電灯、変電機、標識の裏などが全て茶色に塗られており、統一感がある。電灯は、歴史を意識したと思われるデザインである。しかし、この通りにおいてもシャッターの閉まっている店舗が点在し、住宅が多いためか自動車、歩行者の通行量も少なく、寂しい印象を受ける。

通り全体

それぞれの通りによって、道路の状態、通り名を示すペナントや看板、電灯の形が違う。このように、歴史軸という１つの軸に位置づけられているにもかかわらず、3 つの通りには関連性がなく、統一感が感じられない。

以上が、実際に歴史軸を歩いて気付き、感じた点である。

これらを整理してみると、歩行者の安全が確保されていないこと（主にみはし通り）、景観を損ねる様々な要素が存在すること、歴史遺産が十分に生かされていないことが問題点として浮かび上がる。つまり、これらの通りは歴史軸と言っても何の役割も備えていないと言える。これでは、人々が歩く楽しみを感じることもなく、宇都宮市の新しい顔として定着していくこともない。宇都宮市のシンボルとなる宇都宮城と城址公園の存在感を十分にアピールすることもできない。

目標とする歴史軸の姿の実現に向けての課題は、まず、歩行者の安全を考えた通りの整備（バンバ通り、みはし通り）、景観を阻害する要素の除去、歴史遺産の活用である。しかし、それらを解決するだけでは目標を達成することはできない。歴史の香り立つ通り、そして宇都宮市の新しい顔となる通りを実現するためには、歴史を感じられる要素が今以上に必要となるからである。これを新たに創出していくことが、最大の課題となる。

３、提案

ここでは、前項において見出した課題を解決し、目標とする歴史軸の姿を実現するための、具体的な施策を提案していく。ここで確認となるが、この提案において、目標とする歴史軸の姿は歴史の香り立つ通りであり、その役割は宇都宮市の歴史に再び光をあてること、また宇都宮城と城址公園の存在感を十分にアピールし、人々の足が自然と城址公園まで伸びるようにすることである。最終的には、宇都宮市の新しい顔としての歴史軸となっていくことが望まれる。

まずは、今回の提案の対象である歴史軸に「なるほどおり」という名称をつける。「なるほどおり」という愛称には、通りを歩くことで宇都宮市の歴史に触れ、「なるほど」と新しい発見や感心をしてもらえる通りとなってほしいという願いが込められている。

そして次に、この「なるほどおり」を一括して管理・運営する「なるほどおり連盟」（仮称）を発足させる。この「なるほどおり連盟」は、今ある 3 つの通りの組合を基に構成され、歴史というテーマにおいて共通のビジョンを持ちながら、協働して「なるほどおり」を創り上げていくことを目的とした団体である。こうした団体があって初めて、目標とする歴史軸の姿を実現することが可能となると考える。

これから記す提案内容は、総括して「なるほどおりプラン」とする。このプランの目玉は、通りを歴史資料館にすることである。これは、現在埋もれてしまっている歴史遺産を活用することと、人々に宇都宮市の歴史に触れる機会を提供することが目的であり、歴史を感じる通りの形成において主幹となるものである。以下から、「なるほどおり」の整備内容、歴史資料館における資料の展示方法、景観を改善するための空き店舗・空き地の活用、回遊性を創出するための歴史発見スタンプラリーの実施について提案していく。

（1）「なるほどおり」の整備

多くの歴史資料を展示すること、同時に複数の人々が歩くことを考えると、本丸通りはともかく、バンバ通り及びみはし通りの歩道は狭いため、これを拡張する必要がある。最低でも、人が 2 人並んで余裕がある程度の幅が必要であろう。それを確保する手段として、まず、バンバ通りにおいては、歩道の幅を狭めていた花壇や看板を排除する。次に、みはし通りにおいては、建物を後退させる（セットバックを行う）。さらに車道を一方通行もしくは歩行者天国にする。また、歩道を遮るだけではなく、景観を損ねる要素ともなっていた電柱、電線を埋設する。こうして歩道を広く確保することができれば、人々は自動車に気を取られることなく、安心して展示物を観覧することができる。

美しい景観を創出することは、人々に歩いてもらう通りとなるために必須である。バンバ通りにおいては、景観を阻害する要素の除去が必要となってくる。まず、ゴミ捨て場に裸の状態でゴミが捨てられること、及びゴミが置かれていない時にも歩道が汚れているという状況を解決しなければいけない。そのための手段として、ゴミ捨て場に蓋が開閉式のコンテナを設置する。落ち着きのある色で塗装すれば、通りにあってもそれほど違和感はないだろう。また、通りに雑然とした印象を与えていた看板や公告については、規制をかけることで通りから排除する。みはし通りにおいては、埋もれている歴史遺産を生かした景観を作り出す必要がある。まず、御橋に覆いかぶさるように茂っている植木を手入れする。また、琴平神社に関しては、夜間にライトアップを行う。神社の前にゴミや荷物を置かないよう注意を喚起することも必要である。

また、通り全体に関して、現状では見受けられない統一感を醸成する必要がある。そのために、まず、みはし通りにおいて他の 2 つの通り同様に石畳を敷く。また、それぞれの通りによって異なるデザインの街灯であるが、歴史というテーマから逸脱したものはないと見受けられるため、そこに「なるほどおり」と記したペナントを下げる。ペナントは「なるほどおり」という認識を人々に植え付けるのに有効の手段であり、一体感の演出においても重要な役割を果たす。これらを行うことによって通り全体に歴史性のある統一感を持たせることができる。

これらの提案の課題として挙げられることは、セットバックを行うにあたって対象店舗・家屋住民の理解と協力が得られるかということ、車道を一方通行か歩行者天国にすることにより他の地域で発生する渋滞などの交通問題をどのように解決するかということがある。また全ての提案内容は多大な費用を必要とするが、実際に実施する際どうやってそれを調達するかということも大きな課題となるであろう。

以上の提案内容は、以下からの提案を実施するにあたって前提となるものである。

（2）歴史資料の展示

歴史資料館はストーリー仕立てにすることで面白さが増すと考える。展示する資料は二荒山神社に近いバンバ通り商店街から、城址公園につながる本丸通りに行くに従って時代を経る。宇都宮市で発掘された古い時代の土器や埴輪から、宇都宮城が消失するまでの時

代を追うことができるものを展示する。「なるほどおり」の両端には案内マップを設置し、来街者にアピールする。

資料の展示方法としては、人々が足をつける歩道に資料の展示ブースを埋め込む。埋め込み式が適さない場所には地上に展示ブースを設ける。また、資料についての説明を添えた木製の立て札を展示ブースの脇に設置することで、通りに歴史性を演出する。資料は市役所にある文化財研究展示室のものを活用できると考える。夜間は歩道に埋め込んだ展示ブースをライトアップすることで、通りを明るくする。それによって、安全性の向上、美しい景観の形成、また防犯においても効果が見込める。

ここでの提案内容には多くの課題が伴う。まず 1 つ目は、資料の選定や確保である。街中に歴史資料館を作ることは話題を呼ぶに違いないが、その集客力は一過性のものであることが予想される。歴史資料館の成功には人を引きつける資料が必要不可欠である。2 つ目は、展示物を管理する人材の確保である。貴重な歴史遺産であるため、徹底管理が行なわれなければならない。この解決方法としては、個人ボランティアや市民活動団体に協力を得ることが考えられる。ボランティアの登用によって経費削減がなされることのみならず、市民の手によるまちづくりの実行という点で、地域に根ざした通りとなるという効果の派生が期待できる。3 つ目は、住民からどのように協力を得るかである。展示ブースや説明板の設置に関しては、近隣住民の理解と協力を請わなくてはいけない部分が大きい。さらに、その周辺のゴミ問題など、景観の維持を地域住民に行ってもらうことも必要である。4 つ目は、多大な費用をどのように調達するかである。ここでの提案内容も、実際に実施する際には多大な費用がかかることが予想される。1 つの解決方法としては、「なるほどおり」や城址公園に募金箱を設置し、「なるほどおり」管理運営費を集めることが考えられる。やってきた人々に賛同してもらえるかどうかで募金による集金額も変わってくる。よって、地域住民の通りを良くしようとする気持ちを鼓舞することも期待できる。

（3）空き店舗・空き地の活用

「なるほどおり」には空き店舗が複数存在し、そのほとんどは、寂れた様子で放置されているのが現状である。一方で、この通りには宇都宮城にちなんだ土産物屋や、腰をおろせる甘味処やお茶屋など、歴史というテーマ性を持つと同時に一休みできる店舗の存在が望まれる。よって、それらの空き店舗を市で借り上げ、土産物屋や甘味処として再生する。また、歴史というテーマを設けた上で業種は限らずに、店舗の運営団体を公募することも面白いと考える。しかし公募にするとなかなか希望者が出てこない可能性があるので、その対策として、曜日替わりで複数の団体に運営してもらう形態にしてはどうだろうか。このアイディアはとちぎ市民まちづくり研究所のコミュニティビジネス施設「ソノヨコ」からヒントを得たものだ。店舗を高校生や若者に職業体験をさせる場として利用することも、話題性を持たせる上で効果があるだろう。若者がそこに根を下ろし実際に店舗を経営することとなれば、その地区の活力向上の手段にもなり得ると考えられる。

さらに、空き店舗は新たな店舗として再生する以外に、外に展示できない資料を展示するスペースとして活用する。中にベンチを置くことで、一休みできる場所の提供もできる。

加えて、空き店舗に限らず、店のシャッターには歴史を感じるペイントを施すなどし、休業日や夜間の景観も充実させる。しかしこれは当然、商店主の協力を得ずには実行できない。協力を得る方法として、宇都宮に縁のある芸術家に絵を書いてもらうなどして、1つの作品としての価値や希少性を付与することが考えられる。

空き地や空き店舗を取り壊した後の更地においては、歴史を見るだけでなく、実際に体感できる場所を作り出す。具体的には、宇都宮城の代表的なエピソードである釣天井事件をモチーフとしたからくり屋敷を建設する。さらに、からくり屋敷とともに周辺をポケットパークとして整備する。それにより、通りに緑化された憩いのスペースが誕生する。そして人々が集い、子供が元気に駆け回る場所として定着すれば、歴史というテーマと人々の生活との融合が図られ、「なるほどおり」を代表する場所になるかもしれない。

国有地である空き地は、幅が狭く奥行きがある形状のため、屋根をつけて簡易休憩所として活用する方法が最良だと思われる。

（4）歴史発見スタンプラリーの実施

中心商店街から城址公園へと足が伸びるよう、また楽しみながら歴史に触れてもらえるようスタンプラリーを実施する。「なるほどおり」の両端に設置された案内板に、スタンプ台紙とその説明書を置く。各展示物の説明板と城址公園内にスタンプ所を設置し、全部集めると「なるほどおり」で使える割引券や商品券が当たる抽選券と引き換えることができるものにする。抽選にははずれがないようにすることで、スタンプラリーへの参加を促す。抽選は土産物屋などにて行う。

これは、人々の足が自然に城址公園まで伸びるようにすること、人々に楽しみながら歴史に触れてもらうことを目的としたものである。また、商店街を巻き込んだ「なるほどおり」一帯の活性化を図るものである。しかし、割引券が大量に出回ってしまうことになっては、活性化を図るどころか逆のことにもなりかねないため、簡単にスタンプを集められないようにする工夫が必要である。その方法として、説明板とは離した位置にスタンプを隠すなどして、その在りかを探す形式にする。もしくは、週代わりでスタンプを数個ずつ設置する。後者を採用すれば、幾度にもわたって通りを訪れる機会を創出することができる。しかし、人々の参加意識を削ぐことがないよう、各スタンプの設置期間を記した冊子の配布をするといった努力をしなければならないだろう。スタンプラリーの実施にあたっては、地域住民にスタンプの管理などの協力を得ることや、各商店に割引券に賛同してもらうことが大前提であり、大きな課題である。その解決に向けては、人々の回遊性を創出することが「なるほどおり」一帯の活性化につながるということを、彼らに辛抱強く説くことで認識してもらうしかない。しかし、これこそが難しいことだ。

終わりに

この提案をするにあたって、最初に宇都宮市の中心市街地について考えてみた時、商業機能の充実という魅力しかないのではないかと思うほど宇都宮市独自の魅力を見出すのは困難であった。しかし実際に歩いてみると、1600 年もの歴史を誇る二荒山神社が街中に存在するという当たり前の事実に改めて気づかされた。このように、貴重な歴史遺産があるにも関わらず、見過ごされているのが現実である。これは、中心市街地に歴史という顔がないからではないだろうか。このような状況下で、巨額の資金を投じて宇都宮城の一部の復元工事が行われている。宇都宮城の魅力を生かすためにも、中心市街地に歴史を感じさせる場所を新しく作る必要があると強く感じる。

そのような意識から生まれた今回の提案がなされることで、歴史の香り立つ、宇都宮市の新しい顔が創造される。それによって、中心市街地において線ではなく面での回遊性が生み出され、中心市街地の活性化につながることを期待する。

歴史軸の整備については至るところで協議がなされているが、現実的な内容について踏み込んだ計画はまだ出てきていない。よって、この提案が一つの方向性を示すものとなれば幸いである。